

【前編】

ご紹介に与りました近藤です。みなさん、ようこそいらっしゃいました。

「まるで見てきたようなホラ話」という表現がありますけども、今日のお話はまるで見てきたようなではなくて、実際に見てきたお話をしますし、かつそれが歴史的な調査研究によって裏付けられるものとしてお話ししたいと考えております。

最初にちょっと理屈っぽいことを申します。演劇とか文学作品を「見る眼」ですね。今日が第 3 回目になります、この品川区共催の公開講座も「シェイクスピアを視る」となっていますが、その「見る眼」について学者研究者たちの間で少し議論があります。方法論ということですけども、第一に文学作品とか演劇とかいうものは、作者が精魂込めて作ったデリカシーのある作品なんだから、内的構成をきちんと把握しなくてはいけない。作品の内的構成を明らかにすることこそ、文学研究・演劇研究であるという観点があります。それに対して、私たち、歴史研究者の場合は、歴史状況というものがあるわけだから、その「作品のおかれた時代の中において考える」ことが必要だと言っております。が、少数派であります。二番目に、作者の狙いと言いますか、作者が創作した内的な宇宙というものがありますけれども、それとは別に、私たち歴史を見る者は、文学作品だったらその読み手ですね、演劇だったらその聴衆ですね、聴衆観衆たちがどういう風に受け止めたかっていうことにも注目したいと考えております。

言いかえますと、この『ハムレット』という演劇の中で、ハムレットという超個性的な人物がいるわけですけども、大学をきちんと卒業したのか、それともまだなのかよくわからないような男性です。その彼と相思相愛に違いないんだけど、なんか関係がギクシャクしているオフィーリアという清純な乙女。それから、ハムレットのお母さんですね、女盛りのお母さん。こうした人物がどう描かれているかということについては、シェイクスピア以来 400 年の間いろんな人が議論してきましたから、何千何万の研究や書き物があります。私たち歴史研究者の場合、それを無視するわけではなくて、むしろシェイクスピアが生きた時代、西暦で言うと 1600 年前後ですが、その頃を「近世」と歴史家は呼びます。「近世」という時代の見直しにあたって、シェイクスピアの作品、とりわけハムレットはどういうふうに史料として、同時代史料として役に立つのか、といった観点で見ております。英文学の人たちからは邪道だと思われるかもしれません。今、英文学の伊澤先生との間で火花が散っております。それから 17 世紀のスコットランド王であり、イングランド王でありますジェイムズという国王の捉え方も、歴史研究で、この 20 年、30 年の間に大きく変わってまいりました。そうしたことについても今日お話しできればと思っております。

最初はスクリーンを見ていただきます。シェイクスピアが亡くなった後 1623 年にその全集が出ているわけですが、上から読んでいきますと Mr. William Shakespeare's comedies, histories, & tragedies. とありますね。シェイクスピアはいろんな作品を書いているわけですが、そのうちでも、“Comedies” は「喜劇」と訳されますけども、要するに、バカみたいなことをしてみんなで騒ぐとか、あるいは誤解によって人間関係が綻ってしまうとか、混乱ですね。それを舞台上演じてみんなが楽しく、わははと笑う、そういう劇ですよ。これをシェイクスピアもたくさん書いています。

“Histories” は私たち史学科の教授たちが書く論文ではなくて、この場合は、「史劇」ですね、歴史的な劇。主に王家の由来、どういう由緒で今のようになっているかということを題材に、イギリス王家の正当性みたいなものを明らかにする作品群、そういったものをシェイクスピアは、若いときにたくさん書いています。それから三番目の“Tragedies”「悲劇」ですけども、悲劇というのは、何か困難な時代に、

主人公が誠意を持って一所懸命なんとかしようとするにもかかわらず、なぜか不運に見舞われるとか、あるいは、何かのせいで不幸に終わってしまうとか、そういう人の運命を考えさせる劇ですね。こういうのとはまた別に、牧歌的なお話とかもありますけども、主にこの「喜劇」「史劇」「悲劇」。江戸っ子ですと「史劇」と「悲劇」をちゃんと発音するのは難しいかもしれませんが、私は関西の生まれですから簡単にできます。(シェイクスピアは)「史劇」と「悲劇」を書いているわけです。

シェイクスピアについては、第1回第2回のお話で、お二人の先生が十分にお話してくださった通り、人殺しにもいろいろあるということで、1564年に生まれ、1616年に死ぬ、そういう人です。今日特に問題にするのはハムレットです。スクリーンを見ていただきますと、The Tragical Historie of HAMLET, Prince of Denmarke, By William Shake-speare 今とちょっとだけ綴りが違う。例えば Shake-speare でも「槍つかみ」というふうに語源がそのままだったりします。“S”の形が立っているとか、Denmarkのおしりに“e”が付いているとかいうふうに、今とちょっと綴りが違いますけども、中世英語ではなくモダン・イングリッシュですので、ちょっと注意して読めばそんなに大変なことでありません。

この本が出たのは1603年ですが、今日のお話にとって1603年はとても重要な年なんです。イギリス史では、ジェイムズ1世が即位した年でありまして、日本人にとっては、徳川家康が征夷大將軍として江戸に幕府を開いた年。家康さんも、シェイクスピアと同じ1616年に死にました。今年は死後400年目です。両国の江戸東京博物館でもいろんな催しをやっています。ここで見て欲しいのは William Shake-speare の下、ちょっと英語の授業のようなことを申しますと、As it hath beene diuersetymes acted by his Highnesse servants in the Cittie of London 「ロンドン市の陛下の臣民によって何度も上演されたとおりに」。as also 「さらにまた」、in the two Vniversities. “u”と“v”の区別はこのころはありません。“v”の方が正しいとされていたわけですが Vniversities of Cambridge and Oxford, 「ケンブリッジとオックスフォード両大学において」、and else-where 「それ以外のところでも、上演されてきたとおりの台本である」ということです。この本が出版されたのは、ロンドンで1603年だけでも、すでにその前から上演されている劇の記録なんだとこのタイトルページに書いてあります。

実はシェイクスピアの専門家たちは1603年の刊本は、そんなにいい刊本じゃないんだというふうに扱ってきました。なぜかという、実際に上演されたのを暗記力の優れた人が、終わったと同時に書きつけて作ったものとされています。この時期の人たちの暗記力はすごいもので、国会の議事録もやはり、議場の中でメモをとることは禁じられていましたので、議場から出て、紙にワッと書きつけるというふうにしていました。それゆえに、いろんな大事な書き落としがあるということです。それが証拠に、後に出た全集の『ハムレット』の行数に比べて、すごく少ないと。こちらは一種の欠陥商品という軽い扱いをされていたようです。ただ、刊本として現れた最初ですし、前年の1602年に、当局にその出版登録がされていますけども、どうも後の版には無いセンテンスや演技のト書きもあつたりして、それなりの存在価値はあるようですね。ここでご覧にいれているのは、ようするに『ハムレット』をはじめとするシェイクスピアの演劇は、ただ刊本を見るだけでは足りない場合がある。上演されていたものの完璧な記録はなかなか無いものですから、かろうじて残っているいくつかの刊本からどういう上演がされていたのか、それからまた私がこれから申しますような、いろんな周辺の事情を研究することによって、どういう演劇だったのか、ということに迫っていくアプローチをせざるを得ないと思われま。

これはジェイムズ1世です。後でもっと詳しく申しますが『ハムレット』という演劇を語るにあたって、ジェイムズ王の存在は極めて決定的です。特に、この国王とお母さん、お父さんとの関係を理解せ

ずに、『ハムレット』という劇を理解することはできない。特にこの劇が、ロンドンの市民たちに対して持っていたインパクト、想像力を掻き立てられる事実を背負って、この人は生きていたのです。しかもジェイムズ王は右手にペンを持っていますね。学者ですし、彼自身がインテリなのですが、そういったことについて、お話ししたいと思います。

〈ロンドンからエルシノールへ〉

そこで、まずはみなさまを旅にお連れしようと思います。ガイド・ツアーのように添乗員みたいにして、みなさん全員を、ロンドン及びデンマークへお連れします。

これは飛行機から私が撮った写真です。ロンドンに何十回も飛んでいても、幸運でないという写真は撮れないですね、まず、ロンドンが晴れてなくてははいけない。真上を上手に飛んでくれないといけなし、かつ、ロンドンの都心部に向けた側の座席に座ってないといけなし。窓際にでかい図体の男性がいたら、アウトですよ。翼がここにありますが、上手に撮れました。興奮してパチパチパチパチ撮りました。この真ん中にあるのがご存じのバッキンガム宮殿、エリザベス女王が現在いらっしゃる場所ですね。ここがテムズ川で、国会議事堂がありますが、ロンドンのシティと申します経済活動の中心は右上の方にあります。テムズ川がこちらから流れて行って、この何十キロ先に海があるのですが、何十キロ先にもかかわらず、ヨーロッパの川は平らですので、潮の満ち干がテムズ川には影響します。ですからこの辺にいても、今、干潮なんだ、満潮なんだということがわかる。そういう潮位の変化がありますね。

これは概念図としてロンドンのシティ。地上に降り立ちまして、テムズ川のほとりからシティの中心街、今の東京でいえば、日本橋とか大手町とかそういったあたりですね。それを遠望しています。これからサザク、川向うの南岸にお連れしますが、私がカメラを構えているのは、歩行者用の橋でして、テムズ川を見ておりますが、見えるでしょうか、ロイヤルフェスティバルホール、コンサートホールですね、それから劇場、映画館とかロンドンの演劇の一つの中心地となっています。ここだけではありませんけどね。食べ物屋、飲み物屋もあり、これは“wagamama”というお店です。

エリザベス 1 世の時代のロンドンの地図としてはこれが有名ですね、先週の中野先生も白黒でこの辺をご覧いただいていた。それからロンドン橋、“London Bridge is Falling Down ♪”の橋ですが、ちょっとまがまがしい絵ですけど、ご覧になると、このロンドnbrブリッジの入り口の門に、死刑囚たちの頭蓋骨が、そのまま朽ち果てるまで、カラスが食って骸骨になっても、嵐や強い風が吹いた夜にコロんと落ちるまでそのまま放っておくのです。それから、この時代のロンドンでは豚が放牧されていたことも、この絵には描き込んであります。みなさん今 BBC のドラマで『戦争と平和』ご覧になっていますか？トルストイの『戦争と平和』でも、豚がモスクワの街で放牧されている場面がありましたね、それと同じでヨーロッパの街では、昔はごく普通に行われてきたことなんです。

今見ていただいたようなカラフルな絵は、種本といいますか、元の銅版画がありまして、これです。とても大きな絵で、オランダ人が 1616 年、偶然ですが、シェイクスピアの亡くなった年に描いた極めて詳細なロンドンの鳥瞰図がありまして、それを元にしています。確かにロンドnbrブリッジに頭蓋骨がありますし、今では再建されて元の形とは違いますが、聖ポール大聖堂も描き込まれています。さらに拡大しますと、ラテン語でテムズ川が「タメシス・フルウィウス」と記されている。ヨーロッパ中で、英語、オランダ語が分からない人にもこの絵図を買ってもらえるように、このようになっています。注目

していただきたいのは、UFO のような形をした二つの建物があります。これが劇場で、煙のところに書いてありますように The Globe 「グローブ座」ですね。左は、The Bear Gardne. "garden" の綴りが今と違いますが、そういった建物も書き込んである。これを根拠にして、後の人たちが、色をつけて絵図にしたわけなんです。

そのグローブ座は無くなってしまいましたけども、ちょうど 2000 年ころにロンドンの川向こうが再開発されるときに、いろいろ大規模な面白いプロジェクトがありました。ニューテイトギャラリーは行かれた方が何人もいらっしゃると思いますけども、元の発電所ですね。その発電所が川のすぐ正面にあったわけですけども、その中の発電機等を撤去して、モダンアート、現代美術の美術館にしているわけですが、そのすぐ脇に"The Globe Theatre"というものを作りました。その建設中の写真です。木組みで 3 階建ての建物を作っていますが、その向こうに大きな赤黒いレンガでちょっと見にくいですけど、煙突が見えるでしょうか？これが、今はニューテイトギャラリーになっている発電所のでかい建物です。この頃は廃屋ですが、映り込んでいます。

現在のグローブ座は、こうなっています。さっき見ていただいた歴史的な地図にあるのと同じ設計ですから、桟敷席 3 階建てで、丸く天井が開いているんですね。雨の日はどうするかって、それは濡れればいいんです。イギリス人たちはサッカーを観るときも演劇を観るときも雨なんか気にしていません。日本人だけが遠慮しながら傘開いてもいいかしらと開いたりするんじゃないか。雨のことは想定内なんですけども、1 つ、これが出来上がってから想定外の問題がありました。それは飛行機なんです。飛行機がこのグローブ座の真上を通るんです。何百メートルも上ですけど、それにしても騒音はそれなりのもので、10 秒ほどかもしれないけど、その間演劇をストップするわけではありませんので、うるさいなという気分になりますね。

真ん中は平土間になっていますから、そこの観客は立って観ています。これはシェイクスピアの時代と同じ。そして、上の桟敷席には座っていますけれど値段は高い。観客と演技する俳優たちがすごく近いです。手前も広がっているし、後ろにも観客がいるので、観客のど真ん中で演技しているようで、臨場感があっていいものですね。

『ハムレット』劇の謎

『ハムレット』という劇についてはみなさん、どの程度覚えてらっしゃるでしょうか。“The Tragical History of HAMLET”というわけですから「悲劇的な」。“History”という言葉は、古い英語で、「史劇、歴史的な劇」という意味もあればまた「物語」という意味もありますから、「デンマークの王子ハムレットの悲劇的な物語」です。場面はエルシノール城です。後でご案内しますが、実在する街で、そこのお城は現在、クロンボー城と呼んでいます。何年にあった事件だとは劇の中では明言されていませんけれども、歴史家の知恵を働かせますと、これは 1502 年より後、99 年までの間の事件。つまり 16 世紀の出来事だと言うことがはっきりします。登場人物の主人公ハムレットはデンマークの王子でして、ドイツの大学に行っています。卒業して帰ってきたかどうかは分かりません。年齢も 20 歳だったり 30 歳だったりいろんな解釈があります。この演劇の始まりは、デンマークの王、国王陛下の名前も同じハムレットですが、ハムレット王が急に亡くなって、ただちに、その弟君クローディアスが即位した。葬式および戴冠式のために、急ぎハムレット王子が帰ってきてみたら、母ガードルードがなんと、夫の弟であるクローディアスと再婚しているだけじゃなくて、とても親しげでラブラブな関係でいる。それを見て、ハムレット青年が、「お母さん、何なの？それでいいの、お父さんのこと忘れたの？」という話。すごく

単純化すると一面ではそういうことですね。もう一つ、実は、私は高校2年の時に初めて『ハムレット』を読んで、その時、誰の訳でも無く、研究社シェイクスピア双書の原文で読んだんですけども、そのときの英語力の問題なのか、父親ハムレットが亡くなったのだったら、何故その長男、一人っ子である同姓同名のハムレット王子が即位しないんだ、ということがわからなくて、不条理劇そのものというふうに思ったりしました。

そのハムレットのドイツの大学で学友だったホレイショはヴィッテンベルク大学からやってきます。ドイツのヴィッテンベルクといいますと、みなさん、高校世界史で習ったことをまだご記憶でしょうか。あのルターの宗教改革がヴィッテンベルクです。95箇条を扉に貼り付けたという1517年のエピソードが残っていますけども、そのヴィッテンベルク大学において学友だったんですね。留学していたんです。その学友ホレイショがやってきて、この劇の最初の場面から、最後にハムレットが死んでしまう場面までずっと立ち会って、劇の進行の証人となるわけです。ハムレット家の血縁者は全員、死に絶えてしまいますので、生き証人としてこのホレイショが活躍するわけです。

いろんな人が出たり入ったりする中で、先の亡くなった「父王ハムレット」が亡霊として出てきて、「私は殺されたのだ、今の国王、弟に殺されて、しかも私の褥を汚されているのだ」と息子に伝えます。それからポローニアス、彼が宰相、宮内大臣と訳してもいいのですが、おべっか使いの宰相です。一種の狂言回しとしてポローニアスが出てきます。彼の息子レアーティズは、パリに留学していたのが、エルシノール城に帰ってきました。その妹のオフィーリア、ポローニアスの娘ですけども、この人とハムレットとは相思相愛のはずですが、何だか大変にギクシャクしていますね。2人は何でそこまでうまくいかないの、というふうに観客たちに思わせるような関係です。それから、フォーティンbrasはノルウェーの王子です。劇のいちばん最後、ホレイショが「私が生き証人として語り伝える」と言って終わるんだったら、高校2年の私も、高貴なハムレットの話はこれで終わるんだと素直に受け入れられるんですが、そのときに、フォーティンbrasというノルウェーの王子が出てきて、「葬儀をこれから盛大に執り行う」と言う。なんでそんなにしやばってくるんだ、ノルウェーの王子が。それがよくわかりませんでした。あと劇中劇団とか、いろいろなのが出てきますが、今、歴史家の眼で見直しますと、デンマークの王宮にですね、ノルウェーからの使節とか、イングランドの使節とかいう外交使節が出たり入ったりしているということが、それなりに意味があるとわかります。それにしても、先程の高校生の近藤が持ちました疑問、「なぜハムレットが王位を継承しないんだ」ということ。そして「何でノルウェーなんだ」という問題ですね。それをみなさんにも問いかけておきます。共通の疑問、「イギリスの観衆むけのデンマーク王子の物語なのに、なんでノルウェーが出てくるんだ」ということですね。

〈デンマーク・エルシノール・ズント海峡〉

デンマークはどこかわかりますか？ヨーロッパの中でこんなに小さい国ですね。デンマークというと、何をみなさん思い浮かべるでしょうか？酪農とか、サーモンもそう、内村鑑三の『デンマルク国の話』もありますね。ノルウェーはここ、イギリスがここにありますが、次に見ていただくのはEUの地図です。EUは、現在28カ国ありまして、イギリスが2年後に脱退するのでしょうかけれども、今から2年間はまだこの地図の通りです。青と赤と2つに色分けしてあります。どういうことかといいますと、赤の方は、フランス、スペイン、ドイツ、イタリアのように単一通貨ユーロを使っている国々です。永世中立国スイスはEUに加わっていませんね。こちらの青いところは、スウェーデンやデンマーク、イギリスもそう

ですけれども、EU のメンバー、フルメンバーなのですが、単一通貨ユーロは使っていない。ポンドとかクローネとかを使っているということで、ヨーロッパ統合の中でちょっと一歩腰を引いているようなところがありますね。さらにノルウェーはいろんな歴史的な問題もありまして、第二次大戦中のドイツとの関係が大変悪かったとかいうこともあるんでしょうか、EU にそもそも加わっておりません。

そういったヨーロッパ事情を少し歴史的に遡ります。これは “The kingdom of Denmark” という 17 世紀の歴史地図ですが、現在、スウェーデンになっているところもデンマーク王国だったんですね。この海峡のところに見えるでしょうか、Elsinore とありまして、エルシノール城、ハムレットの想定舞台がここですね。コペンハーゲンがデンマークの首都。ここがとても狭くなっていますが、“The Sont” と書いてありますけども、「ズント海峡」、バルト海と大西洋とを結ぶ海峡でして、狭いんですが、水深が深いので大きな船が航行できる。昔から今に至るまで、商業・交通の要所であります。

さらに遡りますと、これは 14 世紀から 15 世紀の簡略な歴史地図ですが、デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、アイスランド、それからこの辺の小さな島々が同じ色になっていますけど、1 つの “United Kingdom” 連合王国だったわけですね。

さらにバイキングの時代、デンマーク王のカヌートがイングランドを征服して、そこのお妃を取ってしまい、結婚して、子供を作りました。バイキングとカヌートの話をすると際限が無いんですが、今日中にこの講義を終わらなければなりません。中世の細密画を見ると、バイキングがここ、大きな魚も描かれていますけども、お椀の船みたいなのに乗って、ちょっと牧歌的な楽しい雰囲気がありますけども、板を渡して攻め込んでくるんだよね。20 世紀にバイキングの船を復元したのがあります。幅は約 1 メートル、すごく細いです。長さ 20 メートル位、ロングボートと言いますが、かなり軽快にサーッと進む。そういう船でバイキングたちは、帆も活用しながら動きましたので、中世のヨーロッパの人たちには太刀打ちができない。これも復元したバイキングの船ですが、前から見るとこうです。こういう格好をして攻めてくるのですから怖いですね。

バイキングたちはスカンジナビア、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンあたりの農民や商人やごく普通の人たちなのですが、イギリスに攻めてきただけじゃありません。フランスとかスペインとか、地中海に入って、シチリア島で独自の王国を作っちゃうなんてこともある。こっちの方からギリシャに攻め込んでいったこともある。東の方は、まだロシアという国がなかったんですが、そこに「ルス」という国を作ってしまったら、ということで、現在のイギリス人もフランス人もシチリア人もロシア人も、180 センチ以上の屈強の骨格のいい人たちはバイキングの DNA を持っているかもしれません。その人たちは島伝いに、アイスランドを経てグリーンランド、それからカナダのニューファンドランドまで到達しています。1000 と書いてありますが、ほぼ 1000 年ごろに到達したに違いない。考古学的な根拠で言われているのですが、最初にアメリカに到達して新大陸を発見したのは、コロンブスで 1492 年だ、と学校で教えられますが、それは嘘です。バイキングたちが新大陸まで行って、自由に島伝いに行き来していたわけなんですね。そのバイキングの末裔たちが、現在のデンマーク人たちのかなりの部分を占める。

これは 1600 年ころのエルゼノール、ドイツ語と英語とラテン語のまじった絵図です。ここズント海峡に面した街の名前がエルゼノール (エルシノール)。右にある要塞のような城のことをクローネンブルクとドイツ語で書いてあります。ここはデンマーク王国なんですけども、「ドイチェキルヒ」とありますように、ドイツの商人が随分活躍して教会ももっています。ドイツ語が通用しているわけですね。クローネンブルク城をシェイクスピアやその時代のイギリス人たちは、街の名によってエルシノール城と呼ん

でいるわけですね。ここがハムレットの舞台です。これは鳥瞰図ですが、海峡をこんなにも船がたくさん行き来しているということです。

さあ行ってみましょう。私もこの日、スウェーデン側から船に乗って行っただんですが、いよいよハムレットの城だということで、どんよりとした亡霊が出そうな感じですね。ここに火がついているじゃないですか、赤い火が。これは偶然じゃなくて、灯台として機能しています。デンマークの国旗がかかっています。

上陸して見上げると、こんな要塞です。デンマーク国旗の下に、このように大砲があります。こうやって大砲が海の方へ向かっている。海には、こういう船、でかい船、車を運ぶ船もありますけども、向こう岸に声が届く程の距離、4キロあるそうです。

「オールド・トールボト」と記されてますが、これが税関ですね。行き来している船から関税を取るんです。バルト海は、木材とか小麦とか、現在では鉄鉱石とかすごく豊かな地域でして、北ヨーロッパの資源の海です。出入りする船から関税をとって、デンマーク王家は財源としていたわけです。おとなしく船が関税を払っていけばそれでよろしいんですけども、たくさんの船のなかには、そんなのスルーして行っちゃおうとする船がある。そういうスルーしていく船に対してドカンと撃つわけですね。大砲は、そういう財政的な理由で税関が機能するように据えられていました。

それから17世紀の半ばは寒冷期、小氷期ともいいますけれども、寒くなって海峡が氷結してしまったことがありました。その時にスウェーデン軍が氷結した海を渡って、クロンボー城に攻め込んだわけですね。こちらに指揮官とか、馬に乗った貴族たちがいます。まずは、先に歩兵を固めて行かせるんですね。歩兵が行って大丈夫だ、氷が割れないとなったら、自分たちも行くという、身分の差があるから仕方ないんですけど、そういう昔の戦争の仕方みたいなものが描かれています。

要塞のようなクロンボー城ですけど、中庭はこういうふうに居住空間ですね。入りますと、すぐに懐中電灯を渡されて、「亡霊に挨拶して来い」と言われました。これは写真のためにライトが当たっているんですけども、地下のここに到達するまでの間がなかなか暗いだけでなく、寒い風が吹いてきて、屈強の若者たちと5,6人で行ったんですけど、そうでなきゃとても行けなかったと思います。これは「地の神」ですね。ハムレット王の亡霊ではなくて「地の神」。スカンジナビアの神話の神様がこう鎮座していたわけですけども、手が震えてちゃんとフォーカスした写真が撮れませんでした。

上の階に参りますと、こういう舞踏会とかディナーとかをやるようなホールがあります。そうした中にタペストリーでこういうのがありました。ジェイムズ1世とデンマークのアナ姫との記念のタペストリーというわけですが、タペストリーは、少しずつ歪んでくるからでしょうか、あまり綺麗に写りませんね。代わりに油絵で、これがジェイムズ1世の妃アナ。後で系図を見ていただきますけれども、スコットランド王としてはジェイムズ6世、イングランド王としてジェイムズ1世です。1589年にノルウェー旅行しまして、デンマーク王女のアナ、この油絵は15歳どころじゃないと思いますが、まだ少女のアナと知り合って結婚し、実際ハネムーンをこのエルシノール城で過ごした、というのが歴史的な事実であります。

エルシノール城の出口あたりに行きますと、骸骨を持ったハムレット、デンマーク語でやっていますね、英語では“To be or not to be : that is the question”という演劇をこの城でやるんですね。これは、大学から急ぎ帰ってきてみたらお母さんが自分の叔父と結婚して、ラブラブでやっちゃってる。「何でお母さん、幸せでいられるの？」というふうに、息子から迫られるようなお母さんですから、こういう女

盛りの女優がやって、リアリティがあるんだと思います。この上演そのものは私は観ていません。シーズンのずれた時に行きましたので、パネルの写真を撮っただけです。“HAMLET SOMMER”というのが毎年ここで行なわれています。

それから、街の国鉄の駅の玄関口のところにハムレット像です。それからもう狂ってしまったオフィーリア像があったりして、エルシノールの街、クロンボー城はまさしく『ハムレット』でもっている。売り物にしていますね。

『ハムレット』といいますと、古典的な演出は、ローレンス・オリビエでしょうか。それなりにシェイクスピアの原作に沿った構成ですが、一番最初に、「これは優柔不断の、決断のできなかった男の悲劇である」という余計な台詞が入っていて、観る人たちに先入観を与える映画です。ハムレットといえばローレンス・オリビエというふうに何十年間も君臨してきました。

この『ハムレット』劇の想定するデンマーク王家の系譜を示します。同じ名前の先の王ハムレットがいて、その妃ガートルード、ふたりの間にハムレットは一人っ子です。ハムレット王が急に死んで、ガートルードは、その弟君クロードiasとすでに再婚しちゃっている。ハムレットが帰ったときにはもうすでに再婚しちゃっているという設定です。ハムレットとオフィーリアはプラトニックラブの関係です。宰相ポローニアスの娘、それからポローニアスには男の子レアーティズがいますけども、フランス帰りなんですけど、ハムレットと決闘になる。この系図に出てくる人たちは全員劇が終わるまでに死亡します。つまりデンマーク王家は断絶してしまって、フォーティンブラスというノルウェーの王子が、乗り込むじゃないけども、ポーランドで勝って凱旋する。そのノルウェーの王子に、不思議ですよ、ハムレット自身が最期の言葉として「デンマーク王に選ばれるのは君だ」と言い残して、「私は君に投票する」と言って亡くなるわけですから。「投票する」とか「選ばれる」とは、一体何なの？と思わせる。そういう謎づくしの劇なんです。

そういう謎を解決するには、文学作品を深く、深く掘り下げていくだけでは何も明らかになりません。歴史学者の出番です。それで、この時代がどういう時代かということなんですけど、英語で言うと“Elizabethan-Jacobean”「エリザベス朝およびジェイムズ朝」にイギリスのルネサンスが最盛期を迎えます。イタリアに比べて 100 年ぐらい遅れて最盛期、イギリスのルネサンスです。王朝で言いますと「テューダ・ステュアート朝」なんですけど、そこの所を歴史家は、「長い 16 世紀」と呼びます。今、年表でご覧に入れているような、ヘンリ王が即位した 1485 年位から、1620 年代まで、みなさんの世界史の知識でいいですよ、バルトロメウ・ディアスですか、喜望峰に到達した。それを聞いてコロンブスが、「いや西回りで行けばインドへもっと早く行ける」というので、1492 年にインドを目指して、西回りで出発しますね。その頃からずっと下って、日本では戦国時代をへて、秀吉、家康の天下統一がなされ、徳川幕府が確立するというような時代に、ヨーロッパでもルターの宗教改革がありますし、カトリックとプロテスタントの間の宗教戦争も、イギリスでも、オランダでも、フランスでもあります。それから、アルマダ海戦とか、アメリカのバージニアへの植民が始まるのもこの時代なんですね。そういった時代にシェイクスピアは生きていた。最初のグローバル化、世界が構造的に一体化を開始する時代だからこそ、日本にザビエルが来たり、鉄砲が渡来したり、逆に日本人が遣欧使節としてスペインやローマへ出かけたりということがあった。人やものや知識が熱烈に交流して、経済成長して、ジャガイモも伝わってくる。梅毒も伝わってくる。そういう近世の世界の始まりですね。

そのころのヨーロッパでは海外にも出かけていくんですが、なんといっても 15、6 世紀のイタリアが、

栄えて豊かだったものですから、イタリア戦争と申しますけども、フランス王もイギリス王もドイツの君主たちも、皆争ってイタリアへ出かけて略奪戦争を行います。それから、カトリックとプロテスタントとの対立がある。そうしたいろんなことを 100 年以上繰り返しているなかで、『戦争と平和の法』、トルストイではなくて、グロティウスというオランダの外交官がそういう著作を書きまして、戦争するときにはまずは宣戦布告をする。和平条約を締結したら、もう戦争はおしまい、鉄砲をぶっ放さないといった国際法を定める。「国際法の父グロティウス」が活躍する時代でもあります。そういう激動の時代に専門家は、「諸国家システム」とか「主権国家体制」といいますけども、国と国とが争い合う。弱肉強食で生き馬の目を抜くような時代ですが、そうした時代の中に、『ハムレット』とか、シェイクスピアを置くことによって、これまで見えなかったものが見えてくると、そういうふうに話を持っていきたいんですが、ここで休憩にしたいと思います。歴史家的なお話はこの後で。